

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月27日現在

機関番号：14501
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2012
 課題番号：21520328
 研究課題名（和文） ボードレールからゾラへ、美術と文学における「モデルニテ」概念の継承と変容
 研究課題名（英文） Baudelaire and Zola: Succession and transformation of the concept of “La modernité” in Art and Literature
 研究代表者
 吉田 典子（YOSHIDA NORIKO）
 神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
 研究者番号：20201006

研究成果の概要（和文）：従来のゾラ研究では、ゾラとボードレールの関係が問題にされることはほとんどなかった。それに対して本研究では、自然主義の理論家としてのゾラは反ボードレールの立場を表明しているが、実際は、マネ擁護をはじめボードレールと少なからぬ共通項を持つことを明らかにした。また一般にゾラは、70年代後半にマネや印象派の画家たちから離反していくと言われているが、本研究では、ゾラとマネの共闘関係は80年代初めまで続いており、ゾラの小説とマネの絵画のあいだには多くの相関関係が見られることを示した。

研究成果の概要（英文）：In the conventional study of Zola, rarely is the relationship between Zola and Baudelaire taken into consideration. In this study, we show that Zola, the theorist of naturalism, expresses an antipathy towards Baudelaire, but that Zola, defender of Manet, was, in reality, much influenced by Baudelaire. In addition, it is generally allowed that Zola was somewhat separate in his ideas from Manet and the Impressionists in the late 70s. However, in this study, we demonstrate that a certain correspondence in the relations of Zola and Manet exist up until the early 80s, and that many correlations can be seen between Zola's novels and Manet's pictures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：仏文学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、以前の科研費研究課題（基盤研究(C)平成16年度～19年度）において、「ゾラの小説・美術批評と1860-80年代のフランス絵画の相関関係」について研究し、ゾラとマネを中心とする画家たちが、近代都市パリの社会的・政治的・文化的な文脈の中で

多くの関心を共有しており、そのことが両者の小説や絵画の中でさまざまな照応関係となって現れていることを具体的に検証してきた。この研究を遂行する過程で次のような2つの疑問が新たに生じてきた。

(1) 1つはゾラとボードレールの関係である。詩人であり美術批評家でもあったボード

レールは、1859年にマネと知り合ってから、64年春にベルギーに都落ちするまでマネと親しく付き合い、その才能を高く評価していたと思われるが、66年3月に彼の地で倒れ、67年には死去してしまう。そのボードレールとまったく入れ替わるように66年5月にマネ擁護の論陣を張ったのがゾラであった。ボードレールは1859年末～60年に執筆した『現代生活の画家』において、風俗画家ギースに託して「モデルニテ」の概念を提示しているが、それを純粋絵画の領域で追求していくのがマネである。したがって、同時代の美術界の状況との関わりで見えていく限り、美術批評の分野で明らかにゾラはボードレールを継承していると思われる。しかしながら、非常に奇妙なことに、これまでのゾラ研究において、ボードレールとの関係というのは全くといっていいほど取り上げられていないのである。これはどうしてなのか、両者のあいだには本当に何もつながりはないのか、というのが第1の疑問である。

(2) 第2の疑問は、ゾラがボードレールから多くを受け継いだと思われる美術批評の分野において、一般に70年代後半になると、ゾラとマネや印象派とのあいだにはある種の齟齬が生じてきたと言われていることに関してである。従来の研究においては、両者の不和の証拠として、79年にゾラがマネにやや留保を示し、79年と80年のサロン評では、印象派とりわけモネに苦言を呈している箇所が取り上げられる。そして、結局のところゾラの審美眼には限界があり、マネや印象派、さらにはセザンヌの革新性を真に理解することはできなかった、というのが大方の見解となっている。しかし、79年にマネは新しい市庁舎の壁画プランとしてゾラの小説タイトルである「パリの胃袋」をテーマとした連作をセヌ県知事に提案しているし、80年にはゾラときわめて親しい出版者シャルパンティエの経営する画廊で個展を開いたりもしている。70年代から80年代はじめにかけてのゾラとマネの関係は実際どのようなものであったのか、またゾラは本当にマネの芸術を理解できなかったのかどうか、これが第2の疑問である。

こうした疑問を解明するために、ゾラとボードレールの関係を明確にすると同時に、その仲介者であるマネとボードレール、ならびにマネとゾラの関係について、さらに詳しい検討が必要であると思われる。

2. 研究の目的

以上の研究の背景により、本研究が目的とするのは、ゾラが「モデルニテ」概念を提唱したボードレールから受け継いだものを明らかにすると同時に、ゾラが自身の美術批評活動および創作活動において、どのように同

時代的な関心を推し進めていったのかを、特にマネや印象派との関係から明らかにすることである。具体的には、以下の3つの点を解明していく。

(1) なぜゾラ研究においてはボードレールとの関係が取り上げられないのかについての疑問を解明し、実際にゾラはボードレールをどのように理解していたかについて考察する。また、ボードレールとマネの関係についても再検討し、ボードレールの「モデルニテ」に関する主張は、マネの絵画においてどのように表現されているかを考察する。さらに、60年代のゾラのマネ論において、ボードレールの主張はどのように受け継がれ、また変容しているかについて考える。

(2) 70年代以降のゾラのアート批評について検討し、一般に79年～80年のゾラの「離反」と見なされている言説は、本当に「ゾラの審美眼の限界」を示すものであるのかどうかについて考察する。それと同時に、70年代以降のゾラとマネの交流について、書簡などの資料に基づいて調査検討し、実際に79年に両者は疎遠になったのかについて考察する。

(3) 以上を踏まえ、ゾラとマネは、互いの創作活動においてどのような影響関係にあるのかについて、さらなる調査研究をおこなう。

3. 研究の方法

(1) ゾラのアート批評および美術批評におけるボードレールへの言及について調査し、それらの言説を取り巻く文脈について、できる限り詳細な研究をおこなう。またボードレールとゾラのアート批評を比較検討し、その類似点や相違点について考察する。さらにマネにおけるボードレールの影響について調査し、その影響がもっとも明瞭に現れていると思われる絵画《テュイルリーの音楽会》(1862)について詳しく分析する。

(2) 70年代以降のゾラのアート批評について、その特徴を明確にする。そのために、やはり70年代にマネや印象派について書いているマラルメのアート批評との比較検討をおこなう。さらにサロンと印象派展の関係など同時代の美術界の状況について調査した上で、79年と80年におけるゾラの言説の真意について考察する。また、ゾラとマネの書簡を精査して70年代以降の交流、とりわけ79年～80年の状況について検討する。

(3) ゾラとマネの創作上の影響関係については、これまでゾラの『パリの胃袋』を中心に研究を重ねてきたが、さらなる関係を調査するために、その制作時期に注目しつつ、ゾラの小説とマネの絵画との照応関係を見ていく。そのためには、ゾラとマネ双方の作品に関する研究を踏まえる必要がある。

4. 研究成果

(1) 従来のゾラ研究において、ボードレールとの関係がテーマとして取り上げられることがほとんどなかったのは、ゾラの文学批評には、明らかに反ボードレールの言説が認められるからであろう。美術批評においても、ボードレールへのわずかな言及はさほど好意的なニュアンスは持っていない。ゾラはボードレールだけでなく、ヴェルレーヌやマラルメなどの同時代の詩人には「耳をふさいでいる」と批判されてきたのである。それに対して本研究では、こうした一見あからさまなボードレール批判は、自然主義の理論家としてのゾラの批評の、一種の教条主義的性格によるものと考えた。すなわちゾラの自然主義は、若い頃のロマン派の詩人たちへの熱狂に対する反動によって形成されており、もともと反韻文の性格を持っている。しかも、当時において自然主義と対立していた高踏派や象徴派の詩人たちは、ボードレールを自分たちの先駆者として崇拝していた。したがって、自然主義の推進者としてのゾラは、必然的に反韻文、反ボードレールの立場を主張することになったわけである。しかし、ゾラにおける「理論」と「創作」の矛盾は、これまでもしばしば指摘される場所である。そこで、本研究ではゾラのボードレールへの言及を、断片的な引用として取り上げるのではなく、その言説を取り巻く文脈を十分に考慮し、ゾラが自身の「教義」からいかに逸脱しているかを中心に検討した。その結果、ゾラは心底ではボードレールに深い共感を抱いていた可能性が高いことがわかった。たとえばゾラは、1866年に、天使と人間の闘いを歌ったボードレールの韻文詩「反抗者」をやや韜晦的な口調で引用している。しかし、20年後に出版した自伝的色彩の強い小説『制作』のエボージュで、この小説において自分は芸術家の自然との闘い、その血のにじむような創造の努力を描くのであり、それは「絶対に打ち負かされる闘い、天使との格闘」だと述べているのである。このことは、ボードレールに関するゾラの批評言説が必ずしも彼の本心を表しているのではなく、そこにはかなりの屈折が認められることを示している。この研究は、「ゾラとボードレール—ゾラの文学批評におけるボードレール評価について」（論文①）にまとめている。

ボードレールとマネについては、両者の関係を最もよく示していると思われるマネの絵画《テュイルリーの音楽会》を詳しく分析した（論文⑨⑩）。このタブローには、マネ自身とボードレールをはじめとする友人や知人の姿が描き込まれていることが知られている。これらの人物について、名前だけはほぼ同定されているものの、なぜマネはこれらの人々を1862年という年に、テュイルリ

ー公園という場所に、このような形に配置したのかについてはほとんど論じられていない。また、この絵のちょうど中央に当たる部分は粗いスケッチのような状態にとどまっており、非常に曖昧な形象になっていることについても、問題にしている研究はほとんどない。本研究ではまず、このタブローの「集団肖像画としての意味」を考察し、以下のことを明らかにした。これらの人々は、スペイン絵画、エッチング、ジャポニスムに対する共通の審美的関心を持って、伝統的なアカデミズム絵画に代わる新たな表現を探し求めていた「ポスト・リアリズム」の集団である。彼らはまた、美術アカデミーとサロン展を中心とする既成の制度に対抗する、展示・流通・販売の組織作りを進めようとしていた。それが1862年に発足した「国民美術協会」と「腐蝕銅版画家協会」である。彼らは、画面に描かれているルジョーヌ少佐夫妻（夫人は前景右の女性）の共和派サロンに集まった人々でもあった。前景左の婦人は、マネやボードレールと非常に親しかったポール・ムリス夫人ではないかとわれわれは推測した。夫のムリスはユゴーの信奉者で、夫人はワーグナーを弾くピアニストでもあった。マネがこの集団をタブローの左に置いたのは、彼らが政治的にも「左翼」に位置していたからであると考えられる。

続く「中心部分の謎」においては、形式主義的観点と社会史的観点からその意味を分析した。特に社会史的観点から見れば、中心部の空虚さは、ナポレオン3世の政体自体の空虚さを表すと解釈できる。「帝国の祝祭」を伴奏した音楽家はオッフエンバックだが、その『地獄のオルフェ』（1858）は神話をパロディ化し、社会全体を笑いと快楽の渦に巻き込む音楽であった。中央左のグロテスクな笑いを浮かべた女性は、オッフエンバックの「笑い」の戯画ではないか？また、同じく中央右の子供を連れた喪服の女性は、ボードレールの「寡婦」のモチーフの投影ではないか？本論では、これら2つの女性形象の意味を考察し、ボードレール（ワーグナーの崇拝者でもある）とオッフエンバックを2つの核として組み立てられたこのタブローにおいて、マネがナポレオン3世への批判を巧妙に隠しつつ、同時代の社会を表象していることを明らかにした。

以上のように、《テュイルリーの音楽会》においては、マネとボードレールが共有していた「モデルニテ」の種々の相を読み取ることができる。それは、単に現代の主題を描いたというだけではなく、スペイン絵画における激しいリアリズムや大胆な色彩、日本版面の平面性や色面による構成といった造形表現のレベル、アカデミズムに対抗する芸術家たちの自主的な展示や販売の活動という制

度の問題、さらには帝政に反対して自由を求める共和主義の思想などにも及んでいる。ゾラもこれらのモデルニテの諸相をほぼ継承している。本研究では、ボードレールがフランスの最初期の日本美術愛好家の一人であることを確認したが、ゾラがマネ論でボードレールに言及している箇所では、マネの絵画と日本版画の関係を指摘しつつ「色斑」の概念を展開しており、ここにボードレール、マネ、ゾラを結ぶ1つのラインが見いだされることがわかった。

(2) 70年代以降のゾラの美術批評については論文⑥「ゾラはマネを理解しきれなかったのか—マラルメとゾラのアート批評におけるマネ評価について」および論文⑤「ゾラのアート批評と印象派—1879年と80年の「印象派批判」を中心に」において考察した。一般にマネと文学者の関係を語る際に、ゾラとの関係は60年代後半が中心であり、74年以降についてはマラルメとの関係が重視される。1876年のマラルメによる「印象派の画家たちとエドゥアール・マネ」は、マネを印象派の主導者として位置づけ、「印象主義」の美学の特質をとらえようとするものであった。筆触や色彩の重要性を指摘するマラルメの評論はきわめて重要なものであるが、結果としてマネと印象主義を強く結びつけ、そこにフォーマリズムの系譜を見いだすことに貢献したことも確かである。近年の美術史研究では、モダニズム再考の気運とともに、マネと印象派を切り離し、また彼らの芸術を、もっと多様なアプローチによって考察しようとする流れがあり、その中でゾラのアート批評は再評価できる可能性があることを指摘した。

70年代のゾラのアート批評の特徴は、芸術表現そのものの美学的問題を扱うよりも、社会的現象としての芸術の問題に重点を置くものであり、とりわけ制度論的な観点から公式サロンと印象派展を分析しようとするものである。ゾラが79年と80年に印象派、特にマネに対して投げかけた安易で拙速な仕事に対する苦言は、従来指摘されるようにゾラが印象派のスケッチ性や視覚混合の技法を理解しなかったのではなく、当時の印象派が置かれていた社会的状況を踏まえた上で、十分に構想を練った「傑作」を世に問うことで万人を納得させるべきだという助言であった。ただし、ゾラの批評からは、印象派の画家たちが装飾性への志向を示して、人間や社会の現実を見据えることから遠ざかっていく傾向を見せていることに不満を覚えていることも読み取れる。

マネとの関係に関しては、まず、70年代にもゾラはマネを擁護し続けていることを確認した上で、79年のマネに対する「留保」の

理由を考えると、印象派の場合と同様、マネがその頃もまだ「公衆の無理解」に苦しんでいたという事実が挙げられる。ゾラは、マネにもう少し公衆の敵意を和らげることのできる「手=技術」があれば、と考えたのであろう。しかし、印象派の場合とは異なって、ゾラは翌80年にはマネに対して「倦むことのない自然主義の職人」として最大級の敬意を払っている。またマネの死後、1884年に開催された遺作展のカタログにゾラが寄せた序文は、これまであまり顧みられなかったテキストであるが、ここでゾラは79年のマネへの一種の「失言」を修復し、あらかじめ定まった手法を持たないことにこそマネの「天才」があることを認めており、ドラクロワ、クールベに次ぐ存在としてその歴史的価値を高く評価していることを示した。

実際、70年代以降においても、ゾラとマネの交友は続いていた。論文③「1870年代のマネとゾラ—書簡を中心とする交友について」は、とりわけマネからゾラへの書簡やその他の証言を通じて、二人の交友を跡づけたものである。彼らはゾラの親しい友人でもあった「自然主義の出版者」シャルパンティエ家のサロンでも顔を合わせており、また互いを自宅に招いたりして、家族ぐるみで良好な関係を継続していたことを明らかにした。そして、論文②「1879年のマネとゾラ—共和派政権の誕生と市役所壁画プランを中心に」においては、一般にゾラがマネから離反していくと言われている1879年においては、とりわけ共和派政権の誕生と自然主義キャンペーンの盛り上がりの中で、ゾラとマネの共闘関係は再確認された可能性を指摘した。そして「パリの胃袋」を主題とするマネの壁画プランが、その共闘関係の中で構想された可能性が高いことを確認した。

(3) 以上のように、ゾラとマネの共闘関係はこれまで1860年代後半がピークだと考えられてきたのに対し、本研究では、1870年代からマネが亡くなる1883年まで、両者の関係は継続していることを確認してきた。彼らはとりわけ芸術の自由を求める共和主義者として、時代の政治的・社会的関心に則した共通の関心を抱いていたのである。論文⑩「ゾラとマネ：共和主義者の共闘—1870年代パリの都市情景における芸術と政治の問題について」においては、マネによるパリ市役所の壁画プラン(1879)を出発点として、『パリの胃袋』(1873)から『ボヌール・デ・ダム百貨店』(1883)までのゾラの小説と、マネや印象派の絵画の関係について検討した。第3共和制初期のフランスにとって最大の関心のひとつは、普仏戦争とパリ・コミュンで疲弊したパリを復興し、新しい共和国の首都として再構築することであった。とり

わけ画家たちの関心は、第2帝政期のパリ改造によって作られた単調で面白みのない都市を、より多様で活気に満ちた色鮮やかな空間へと「装飾」することに向けられた。マネの壁画プランもそうした共和主義的な「装飾」の一環として考えられるが、鉄とガラスの中央市場を野菜や果物の鮮やかな色彩の斑点「タッシュ」で彩色したゾラの『パリの胃袋』は、画家たちに新しい芸術の指針を示したと考えられる。この小説は、モネやルノワール、カイユボットらの都市風景画、そしてマネの《モニエ通り》連作にも影響を与えているが、とりわけマネの作品には、新興ブルジョワの街並みと労働者の悲惨が対比され、『居酒屋』『ナナ』と共通する社会認識が認められることを示した。

ゾラとマネの共通の関心は、都市パリの情景だけでなく、そこに生きる人々、とりわけ女性や娼婦にも向けられている。それはボードレールに存在した主題でもあった。マネが自身の絵画を確立していく上でもっとも影響を受けたのはボードレールであり、マネの60年代の絵画（例えば《オランピア》）とボードレールの『悪の華』の詩篇群のあいだには、ヴァレリーの言うところの深い「親縁性」が認められる。一方ゾラは、文学者として自身を確立していくにあたり、友人の画家たちからさまざまな影響を受けたと思われるが、中でもマネの《オランピア》は作家に大きなインパクトを与えた。論文④「オランピア、ナナ、そして永遠の女性-マネ、ゾラ、セザンヌにおける絵の中の女の眼差し」においては、1865年におそらく連れだってサロンを見学したゾラとセザンヌのそれぞれに、マネ《オランピア》がどのような影響を及ぼしたかを考察した。ゾラの場合、《オランピア》の影響は1867年の小説『テレーズ・ラカン』に明瞭に現れている。

一方、ゾラはその後『居酒屋』（1877）と『ナナ』（1880）において、女優・高級娼婦のナナを造型する。マネの《ナナ》（1877）は、先行研究では通常、ゾラの同名の小説と比較され、マネとゾラの相違が浮き彫りにされることが多い。しかし、我々は論文⑦「ゾラの『居酒屋』とマネの《ナナ》-小説から絵画へ」において、マネの《ナナ》とゾラの『居酒屋』第11章のテキストとの関係に着目した。この章では、すでにナナは魅力的な若い娘に成長しており、ナナの肉体的魅力と下着姿での身繕い、自身の魅力の顕示、ナナの後ろにつきまとう老紳士の存在、そしてその老人を置き去りにして、他の男たちに媚態を振りまく態度など、『居酒屋』のナナに関するエピソードは、多くの研究者がマネの《ナナ》の図像から読み取っている解釈と一致することを示した。

創作面におけるゾラとマネの関係を考え

た場合、初期においては『テレーズ・ラカン』のように、ゾラがマネの絵画からインスピレーションを受けているが、70年代以降はどちらかと言えば、マネがゾラの小説からヒントを得ていることが多いように思われる。未発表論文（原稿提出済み）「マネと〈自然主義〉-マネ研究に対するゾラ研究からのアプローチ」においては、72年以降、ゾラとマネが同時期に似通った主題を扱い、またマネがゾラのテキストから示唆を受けていると思われるケースをいくつか検討した。ゾラの『パリの胃袋』とマネの《鉄道》、『獲物の分け前』と《オペラ座の仮面舞踏会》、『居酒屋』と《洗濯物》《ナナ》《ブラム酒》などの場合である。そして、77年頃からマネは〈自然主義シリーズ〉と名づけられる一連の作品を制作しており、80年にシャルパンティエの経営する画廊「現代生活ギャラリー」で開かれる個展においては、そのシリーズに含まれると思われる作品群が展示されていることを示した。「自然主義の出版者」として知られているシャルパンティエは、ゾラと公私ともにきわめて親しく、この画廊での個展はマネがゾラと近い位置にいたことを示している。

マネは1879年の市役所壁画プランで、「パリの胃袋」を主題として、「我々の時代の公的かつ商業的な生活」を描きたいと書いたが、マネの最後の大作《フォリ・ベルジュールの酒場》は、1880年代に入りますます進展する商業主義の中で誕生した「売り子」という新たな労働者に注目し、その眼差しを作品の中心に据えた作品である。ここでマネは、『パリの胃袋』の中のカウンターのリザの描写にヒントを得ている。そして、マネがこの絵画を制作した1881年から82年の冬は、ゾラが『ボヌール・デ・ダム百貨店』の構想と取材調査に取り組んでいた時期であり、ここでもマネとゾラのコラボレーションが確認できるのである。

(4) 以上のように本研究においては、これまでの定説に反し、ゾラはボードレールと通じるものを多く持っていること、ゾラとマネの共闘は60年代後半にとどまらず、70年代以降も継続しており、マネ晩年まで続いていたことを明らかにすることができた。これらの成果の多くは、平成23年12月に京都大学に提出した博士論文「ゾラとマネ・印象派-1860年代後半から1880年代前半における文学と絵画」にとりまとめたが、その後新たに得られた成果を導入して、著書として出版するための原稿を作成した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 10 件)

- ① 吉田典子、ゾラとボードレール-ゾラの文学批評におけるボードレール評価について、ステラ、査読有、2012、239-264
<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/26091>
- ② 吉田典子、1879 年のマネとゾラ-共和派政権の誕生と市役所壁画プランを中心に、近代、査読無、第 107 号、2012、1-36
- ③ 吉田典子、1870 年代のマネとゾラ-書簡を中心とする交友について、流域(青山社)、査読有、第 33 巻第 1 号・第 2 号(通巻 70・71 号)、2012、34-41、56-64
- ④ 吉田典子、オランピア、ナナ、そして永遠の女性-マネ、ゾラ、セザンヌにおける絵の中の女の眼差し、言語文化、査読有、第 29 号、2012、163-192
- ⑤ 吉田典子、ゾラ美術批評と印象派-1879 年と 80 年の「印象派批判」を中心に、近代、査読無、第 106 号、2012、1-40
- ⑥ 吉田典子、ゾラはマネを理解しきれなかったのか-マラルメとゾラ美術批評におけるマネ評価について、ステラ、査読有、第 30 号、2011、149-190
<https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/21016>
- ⑦ 吉田典子、ゾラの『居酒屋』とマネの《ナナ》-小説から絵画へ、表現文化研究、査読有、第 10 巻第 2 号、2011、199-220
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81002919
- ⑧ 吉田典子、マネ《テュイルリーの音楽会》再検討(2)-中心部分の謎、表現文化研究、査読有、第 10 巻第 1 号、2010、67-94
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81002912
- ⑨ 吉田典子、マネ《テュイルリーの音楽会》再検討(1)-集団肖像画としての意味、表現文化研究、査読有、第 10 巻第 1 号、2010、31-66
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81002911
- ⑩ 吉田典子、ゾラとマネ：共和主義者の共闘 -- 1870 年代パリの都市情景における芸術と政治の問題について、表現文化研究、査読有、第 9 巻第 1 号、2009、65-88
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81002903

〔学会発表〕(計 5 件)

- ① 吉田典子、ゾラとマネ、社会の中の芸術-1866~1883 年パリ、神戸大学大学院国際文化研究科メディア文化研究センター研究会、2012 年 6 月 29 日、神戸大学
- ② 吉田典子、オランピア、ナナ、そして永遠の女性-マネ、ゾラ、セザンヌにおける絵の中の女性の眼差し、明治学院大学言語文化研究所・文学部芸術学科主催シンポジウム

「西洋美術とジェンダー-視ることの制度」、2011 年 12 月 10 日、明治学院大学

③ 吉田典子、1870 年代以降のマネとゾラ-マネと「自然主義」、自然主義文学研究会、2011 年 5 月 27 日、慶應義塾大学

④ 吉田典子、ゾラの『ナナ』を読む-近代資本主義社会における「宿命の女」、第 3 回女性学コロキウム(大阪府立大学女性学研究センター)、2010 年 12 月 11 日、大阪府立大学

⑤ 吉田典子、ゾラ美術批評・小説から見るフランス近代絵画、ジャン=クロード・レーベンシュテイン教授来日記念シンポジウム「フランス近現代美術史研究の可能性」、2009 年 9 月 5 日、京都工芸繊維大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 典子 (YOSHIDA NORIKO)

神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授
研究者番号：20201006

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：